1961年1月16日　第3種郵便物認可　1999年4月1日　第447号（毎月1回1日発行1部50円）
（加盟団体関係者の講読料については、負担金に含まれている。）

全仏

ZENBUTSU

447

仏暦2542年4月（1999年）
財団法人　全日本仏教会
JAPAN BUDDHIST FEDERATION

神戸ポートピアホテルで開催された、全日本仏教青年会神戸全国大会
（関連記事8頁）

同和推進担当者連絡会
教化セミナー
　「葬儀のこれからを考える」（下）
加盟団体訪問
　全日本仏教青年会

第八回同和推進担当者連絡会

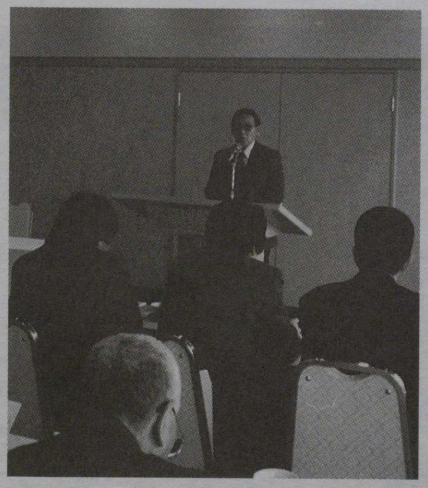
二月十六日、十七日の二日間、岡山県で、第八回同和推進担当者連絡会が開催され、十四団体二十四名が参加した。

今年度は研修会の形式をとり、「渋染一揆」についての現地研修と、ハンセン病への認識を深めるべく長島愛生園・邑久光明園を訪問した。

一日目はまず、岡山部落解放研究所の若林義夫氏に案内役をお願いし、岡山市内及び近郊に点在する寺院や跡地を見学した。

「渋染一揆」は、江戸時代末期に岡山藩で起こった。藩が財政難のため出した倹約令は、被差別部落の人々の衣服を渋染や藍染に規定する等の厳しいものであった。被差別部落の人々はその倹約令を撤回するために立ち上がり、ついには嘆願書を差し出すことに成功したのである。

渋染一揆碑前で説明する若林義夫氏



講演する池内謙次郎愛生園自治会長

参加者一行はまず、当時寄合がもたれていたという常福寺を訪問し、次に渋染一揆資料館を見学した。その後、一揆集結の地である八日市河原に向かい、最後に長泉寺を訪問して宿舎に向った。

参加者たちは、江戸時代の封建制度のもと人権獲得のために断固とした行動に立ち上がった人々の歴史に触れ、改めて、差別と人権についての認識を深めた。

宿舎に戻った後、翌日訪問する長島愛生園の自治会長である、池内謙次郎氏を講師に招き、ハンセン病についての歴史と長島愛生園の歩みについて講演をしていただいた。

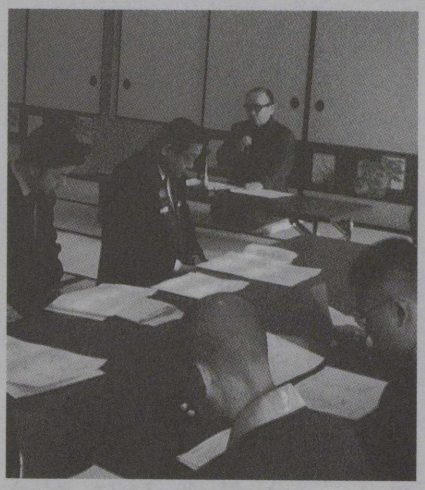
講演の中で池内氏は、過酷な療養所生活や終戦後に画期的治療薬が開発され、不治の病から解放されたにもかかわらず、ハンセン病に対する偏見と差別意識が、らい予防法（一九九六年廃止）の壁のもと変わりなく続いてきた実態について話され、それらを解消する今後の啓発の重要性を訴えられた。

二日目は、長島愛生園・邑久光明園を訪問した。

まず、両園のある長島へ渡る邑久長島大橋のたもとで車を降り、橋の建設の歴史について参加者の一人から説明があった。

この橋がかかったのは、十年ほど前のことであり、前から建設要求の動きはあったが行政の対応が遅々として進まなかったこと、いざ決まった後も、入り口に検問ゲートを設けることで反対運動が起こったことなどを説明していただいた。

次に、光明園を訪れ、まず納骨堂へ案内していただき、献花献香の後、佐々木同和委員長ら、参加者一同は、自治会の方々と共に礼拝した。その後、園内説明を受けながら老人


光明園自治会長、望月拓郎氏

福祉会館へ行き、そこで邑久光明園の自治会長である望月拓郎氏にハンセン病と光明園の歴史ついてお話をうかがった。

その中で、当時の隔離政策によって、強制的に家族と別れさせられた事実、またらい予防法のもと、依然として偏見が存在してきたことなどが語られ、そして、偏見や差別によって、このようなことが二度と起こらないよう強く訴えられた。

次に、愛生園を訪れた。係の方に園内の説明を受けながら、歩いて十分ほどの丘の上にある納骨堂へ案内していただいた。そして、納骨堂の前にて、献花献香の後、参加者一同で礼拝させていただいた。そして、長島愛生園真宗同朋会の多田芳輔氏より納骨堂についてのお話を歴史を交えてうかがった。

その後岡山市内へ戻り、岡山駅で解散して二日間の日程を終えた。

（文責　社会部）

仏教とマルチメディア研究会

二月十九日午後二時から、明照会館会議室で、第六回仏教とマルチメディア研究会が開催された。

はじめに各委員より、所属宗派内の宗務のOA化の進行状況が、具体的事例を交えながら詳細に報告され、質疑応答と意見交換が行われた。

次に、最新マルチメディアの動向について、地上波テレビ放送のデジタル化、音楽ソースの配信サービス、電子出版の動き、NTTの番組配信実験、各保存情報のデジタル化などの現状が出席者から紹介された。

また、デジタル衛星放送について、すでに教化に活用している宗派の委員より、具体的な実施内容等が紹介され、質疑応答が行われた。

また今後、委員会として、仏教とマルチメディアに関しての、講演会やシンポジウムを主催することが決められ、そのための具体的な準備を始めることになった。

仏旗・バッチ頒布御案内

大仏旗　たて一四〇cm×よこ二一〇cm　三二、〇〇〇円
中仏旗　たて九〇cm×よこ一三五cm　一八、〇〇〇円
小仏旗　たて七〇cm×よこ一〇〇cm　九、三〇〇円
手　旗　たて三五cm×よこ五〇cm　八、〇〇〇円
法輪旗　たて九〇cm×よこ一三五cm　七、四〇〇円
仏旗バッチ　二cm×四・五cm　五〇〇円
法輪バッチ　直径一cm　一、〇〇〇円

お申し込み
全日本仏教会財務部
電話　〇三―三四三七―九二七五
FAX　〇三―三四三七―三二六〇

■加盟団体訪問

全日本仏教青年会

世界仏教青年連盟（WFBY）日本センター

今回は、全日本仏教青年会を訪問し、矢坂誠徳理事長、神田謙光事務局長、桂秀生事務局会計担当の各師にお話をうかがった。

（文責　社会部）

※　※　※

はじめに全日本仏教青年会についてお話ください。

全日本仏教青年会（以下、全日仏青）は、各宗派、地域の仏教青年会が加盟する唯一の全国組織です。現在は十三団体が加盟しています。発足時は、東京、神奈川、埼玉、神戸、大阪などの各都道府県の仏教青年会が中心になっていましたが、加盟団体が少ないため各宗派の青年会にも加入していただくようになりました。各宗派の青年会は全国に会員も多いので、全日仏青全体としても会員数は多くなりました。もし加盟団体の青年会の会員数も含めると、会員は約二万五千人になります。

また、全日仏青は、世界仏教青年連盟（WFBY、本部タイ・バンコク）の日本センターとして、国際的な仏教青年活動の日本の窓口となっています。

運営はどのようになされているのですか。

全日仏青は、加盟団体ごとの意見を反映して運営されます。

仏教青年会活動をなさる方の中には、地域に根ざして活動をなさりたい方や、反対に全国組織の中で活動されたい方がおられます。

1998年5月26日、東大寺で行われた花まつり千僧法要。全国から青年僧が多数参集した。

また各加盟青年会の、全日仏青への関わり方も、まず友好親善の場と考えておられる団体もありますが、理想的には精力的に全国的活動を行いたい方が、各加盟団体から推薦を受けて出向していただき、各委員会などの委員をお引き受けいただくなどして、全日仏青という組織を運営していくのが望ましいと考えています。

また、たとえば関東と関西では、自坊の法務の形態が違うため、仏教青年会活動に関われる時間にも地域差があります。こうした制約の中で活動を行っています。

また、各宗派、地域の仏教青年会などはそれぞれ独自の意義ある活動をおこなっておられ、今後そうした活動を全日仏青のレベルまで上げてもらえれば、より有意義なものとなる気がします。

執行部としての活動の中でお感じになったことは。

活動を通して今まで知り合いになれなかった方と全国的規模で交流が持てたことが大きいと思います。

また、先般の大会（一月十八日　於、神戸ポートピアホテル）では、加盟各団体の皆さんに、分科会の運営などをお任せし、主体的に大会運営に関わっていただきました。また、事業の継続性という点では、執行部の任期が

二年ということもあり課題があります。しかし、人が変わって行くということも組織の活性化としては大切なこととも思います。

今回執行部をお受けになった皆さんが所属母体とされている、神戸JB（junior buddhist）クラブについてお話ください。

神戸を中心とした、各宗派の青年僧侶が参加しています。創設二十五年になります。現在、正会員と特別会員を入れて百二十名程会員がいます。また、運営は法人の形態をとっており、僧侶のみでなく仏教徒という立場から一般の方も多数会員となっていただき活動を行っています。福祉活動やボランティア活動を中心におこなっています。

左より神田事務局長、矢坂理事長、桂事務局員の各師

阪神大震災の当時の状況はいかがでしたか。

各地の皆様からの救援物資や、温かいはげましに心から感謝の気持ちを持っております。また実際に震災に遭遇してみて、被災者の立場から多くのことが分かりました。こうした経験を生かして、国際的に災害などが発生した時に対応できる体制づくりに取り組んでいます。

皆さんご自身、被災者として災害時の支援について、どのようにお感じになりましたか。

被災の時感じたことですが、災害時、その地域の被災寺院や仏教会が救援や復興の拠点となって十分に機能するように、他地域からバックアップできれば、それ以後その地域でのお寺や仏教会の存在意義がより大きなものとなる契機になると思います。

阪神大震災の時も、もし被災者である私たち寺院住職がもっと先頭に立って救援・復興活動ができる状況にあったら、それ以後お寺の回りの方々はその地域にお寺があることの大切さに気がついたのではないでしょうか。

こうした地元主体の活動を支援する、間接的な救援活動のあり方も今後は考える必要があると思います。また今後も自立を促す形での支援は継続して必要とされると思います。

一方、震災で地域社会が崩壊し、地縁的であるお寺と信者との関係が現在、再考を迫られています。

また震災直後、同じ被災者ということで人と人の間の壁がなくなり、心の交流からコミュニティーが生まれました。しかし、復興が進むにつれて、また、以前のように人と人の間に微妙な隔たりが生まれています。こうした様々な問題が残されているのです。

このように自らが被災者になって分かった沢山の情報を、今後は神戸から発信していこうと考えています。具体的には災害時の全国規模の支援ネットワークづくりが急務と思われます。

また、追悼法要などの行事も、それぞれの団体の地域との関わりから、現在は別々におこなわれていますが、合同で行うことで調整する努力も必要と思われます。

今後の展望を教えてください。

宗派と地域、加盟団体それぞれの良さを生かして、制約もある中、超宗派の立場から全日仏青が運営されるよう願っています。また、たとえば、各宗派青年会の行事も全日仏青との共催とすることで、より広くの方に知って頂くこともできますし、全日仏青自体の存在意義も大きくなると思います。

平成十年度教化セミナー
葬儀のこれからを考える（下）

前号の本セミナーの討論の部に続き、今回は提言の部を掲載する。紙面の都合で要約し掲載する。

（文責　社会部）

提言の部

碑文谷創氏　葬儀で宗旨の異なる人が会葬することを僧侶が意識し、形式的に執行していないか。葬儀で信者を増やす活動はすべきではないが。伝えるべきものは言うべきだ。

仏教葬儀の広まりは寺檀制度だけで無く、中世以後の僧侶が民衆の葬儀や火葬を行い民衆の霊や人格を認め、葬る必要性を説き支持されたことに因る。仏教葬儀は、納棺から火葬迄、ずっと死者に係わっているが、数時間に圧縮している。これは伝統や教義に依って葬儀を執行しているよりは手抜きに見える。

大村英昭師　葬儀というのは遺族たちのやるせない思いを発散させる場である。そして教義の注入をするのだが、僧侶は注入の面から評価され、その不十分さを批判されて来た。今の問題は、心がこもっていないように見えるところだ。浄土真宗では御信心は生前に得なければと説き、遺族のやるせない思いを共有はして来たが、死者を送ることや引導もなく、それが葬儀では手抜きという印象を与えた。むしろ悲の共有を主張して、自信をもって葬儀を行うべきだ。

また、浄土往生に現実味が不足している様に思う。葬儀は娑婆の苦を捨て晴れの浄土往生を遂げる目出度い門出である。花嫁も、実家を離れる時に婚家で新しい人間に生まれ変われと娘が使っていたお茶碗を割る。同様に、出棺時には、この娑婆世界への未練を捨て一直線に浄土へ行く様にと茶碗を割った。この様な民族の祈りが今は壊されてしまった。

青木新門氏　金子みすずは大漁の詩で「今日は鰯の大漁だ浜は祭りの様だけど海の底では鰯の弔いするだろう」と詠う。彼女は生と死を同時に見てるが、我々は戦後五十年間祭りだけだった。死は医者が、死体は葬儀社が、死者は親族が見て来たが、僧侶は死にどのように取り組んでこられたのか。

生死一如が仏教と思うし、生から死へ移ると心得るは誤りなりと道元禅師は言われているのに、移るという立場で見てはいないか。

また死を隠蔽してきたツケが、神戸の淳ちゃん殺しの様な形の社会現象として出てきた。その一方、臨終の場で「とても悲しく辛くて、本当の人の命の尊さや重さを教えられた気がした。」と感じる同世代の子供もいる。彼の兄は「祖父が祖母に、この後どうなるかねと尋ねた時、ご一緒に参りましょうねと言った。祖父はありがとう、南無阿弥陀仏と言って亡くなった。これからは毎朝お念仏をお唱えします。」と。今は生の現場も、死の現場も無い。現場を見つめずに、対応しているから形骸化して行く。

碑文谷創氏　キリスト教や神道では信者数（約一％）と葬儀が同じで関係者で纏まっている。違うのが仏教で、檀信徒だけでなく幅広く葬儀にも係わり開かれている。

没後作法等、一生懸命位置づけをし、人に対する係わりを考慮している事はプラスの面だと思うが、係わりへの教学が蔑ろにされている様に思う。

中野東禅師　今問題になっている係わりや現場とかは、檀信徒ではない方の葬儀での係わりが中心と思うが。私はグリーフワークという視点で一番求められているのはお悔やみであり、それが最大の係わりだと思う。

青木新門氏　お悔やみ・グリーフワークというのは人間の心を癒すと言う問題で、釈尊の説かれる成仏とは違うと思う。故人に対して、

何故成仏という問題で、仏教が葬儀に係わっているのかが大切な問題だと思う。

中野東禅師　成仏が僧侶の中でも混乱しているようで難しい問題だ。心底のお悔やみがあり慰められなかったら、この世の煩悩を捨てた浄土の世界が、遺族のなかに成立しないと思うし、儀礼が不十分と思われる。しかしながら、この教化活動は難しい事でもある。

青木新門氏　ご一緒に参りましょうねと言える様な人には、お悔やみは必要無いのではないか。つまりは平生の問題ではないか。

碑文谷創氏　身近かな人にとっては死というものに係わって来て引き裂かれる悲嘆があり、それを癒すことも重要なことだ。

大村英昭師　生死一如というか、民族学的には通過儀礼の段階毎に必ず死がある。一旦死に、そして再生する。その最終段階が本当の死で、其の前に何回も予行演習をしているのだ。最終が浄土往生の喜び、葬儀は晴れの門出だから皆で慶ぼうと言うことだ。けれども、その感覚は教えなければ駄目だ。

ご一緒に参りましょうねと言える人は、十分お教えを受けて準備が整っている。私も昔からの檀信徒に携わって来て、かなり教化して来たが東京発信型のマスコミ状況の中では押されている。

また遺族の遺骨に対する思いは強く、その感覚も大事にすべきだ。散骨派でも遺骨には拘りが強い。アメリカでは、今迄火葬文化がなかったため、全くの灰になって袋に入れて渡される。それを散骨しても、日本で言う一周忌に彼らは散骨した場所に、亡き人に会いに行くという気持ちで訪れる。キリスト教の信仰も崩れて来ている様なのだ。

一方、日本は適度な大きさの骨なので、逆に散骨するには砕く必要がある。怖くて砕けない人もいる。ゴミなら何をしようが構わないのに魂がそこに感じられる様なのだ。

碑文谷創氏　墓を巡る問題は多く、承継者のいない人達には永代供養墓を作ることが一九八八年頃から始まった。生前に自分の入るところを選ぶので、自分が委ねる寺院が信頼できるかで選ぶ。檀信徒よりも熱心で寺の活動にも協力的だ。逆に、寺院側は檀信徒だけを守備範囲にして、新しい人達をよそ者扱いしていた体質を見直すべきだ。

墓、老後の老人ホームや家族問題等、死から現在の問題まで係わって来て、寺院も活性化する要素は多い。墓だけでなく、全体的な視野がない寺院には人は来ない。プロテスタントでは、葬儀は遺族のためにが一般的であるが、死者の為に葬儀をしないと力にならない。それに対するメッセージも必要だ。それが欠けると、グリーフケアにもならない。

青木新門氏　結局、死んだ父や母が何処にいったのかが、体ごと解る事が癒しの原点だ。

この俗世での倫理と浄土の世界から見る秩序は、根本的に違うと思うが、人間中心・拝金の俗世でも行き先は常に目指して、この世の秩序を構築しなければならないと思う。

中野東禅師　僧侶に共感がなくて、あの世を語ることほど嫌なものはない。私見だが、人間の愚かさを越えた世界への憧れと死後とを重ねたものが仏教の浄土の観念ではないか。

怨親平等が言われたが、この世の憎しみに対する挫折感がない人間には、それへの憧れを語る事は出来ないと思う。

碑文谷創氏　最近は葬儀や墓の問題を扱うと多くの人が集まる。そこで必ず出るのは戒名と散骨の問題だ。戒名料は戦後の新しい言葉で、信仰と関係が薄いのではないか。仏教葬儀が、経済優先になってはいないか。

青木新門氏　戒名に俗世の名誉や地位がからんで来ているようだが、本来は仏道を目指すことを約束すると言うことではないか。

一般の葬儀での不満は、理解できないと言うことだ。理解させることも大事な仕事だ。

中野東禅師　授戒即成仏ではなく、信心が確立し、更に因縁で修行を続けるのだ。道元禅師の生涯修行という精神と合致する。だが檀信徒に解らせる努力は、確かに必要だと思う。

全日仏青神戸全国大会

一月十八日、神戸ポートピアホテルを会場に、全日本仏教青年会全国大会が開催された。

午後〇時三十分からの記念式典は、全国から多数の青年僧侶が参加。三帰依文唱和、矢坂誠徳理事長の挨拶に続き、蓮清典本会事務総長、島田喜久子全日本仏教婦人連盟理事長により来賓挨拶が行われた。

続いて丸山浩路氏が「ナンバーワンよりオンリーワン！―自分の存在が他の人の喜びにつながる―」をテーマに記念講演を行った。

午後三時からは、「信仰」「救い」「電脳―仏教とマルチメディア」の三分科会に分かれ、それぞれ、二十一世紀に向けての布教活動、青年仏教者における救援活動のあり方、インターネット時代の仏教者としての情報発信のあり方などについて、参加者により熱心に議論が行われた。

また夕刻には同ホテルで懇親会が催され、内外からの来賓祝辞が行われ盛会であった。

翌、十九日は、神戸、淡路地区の阪神大震災の被災状況を見学するツアーが行われ、参加者は震災の災禍の状況、現在の復興状況を実地に認識していた。

事務局録事

―三月―

二日　部落解放同盟全国大会出席
五日　日宗連、日弁連との懇談会
八日　局内会議
十一日　仏教伝道文化賞贈呈式出席
法律相談室
十六日　ルンビニー委員会
近畿圏仏教会連絡会出席
十七日　同和委員会
二十五日　法律相談室
二十九日　戒名（法名）問題に関する研究会
三十日　日宗連理事会
三十一日　加盟宗派顧問弁護士連絡会

哀悼

田原周仁師（全仏元評議員）
一月二十八日遷化　九十歳
臨済宗天龍寺派元宗務総長

法律相談室

長谷川正浩弁護士による無料法律相談を毎月第二、第四木曜日の午後開催しております。本会事務総局（〇三―三四三七―九二七五）へ事前予約の上おいで下さい。

花まつりポスター

本会ではご覧のポスターを頒布しております。明るい春の野に静かに立って、天と地を指すお釈迦さまのお姿は、見る人のこころに安らぎを与えることと思います。地域仏教会、幼稚園・保育園などで広くご利用ください。

◎タテ75cm×ヨコ52cm　◎多色刷
◎1枚　100円（送料実費ご負担ください）
◎なるべく早目にお申し込みください。間際のお申し込みですと4月8日に間に合わないことがあります。

全日本仏教会 花まつりポスター係

一九九九年四月一日発行
四月号　第四四七号
発行人　蓮清典
発行所　財団法人　全日本仏教会
〒一〇五―〇〇一一　東京都港区芝公園四―七―四
電話〇三(三四三七)九二七五